

【研究論文】

デジタル機器を使用した家庭における幼児への英語教育について

-岡崎市 A 幼稚園での取り組み例-

岡崎女子大学 宮腰宏美

要 旨

本研究は、各家庭において、デジタルデバイスを活用した英語教育を行うことにより、幼少期より継続的に英語に慣れ親しむことで効果が表れるかを調査、考察することで、家庭における英語学習について提案することを目的としている。調査の結果、子どもは、時間をかけ、徐々に「英語が好き」「英語に自信をもつ」ようになったこと、親子で一緒に観たり、より多く外でアウトプットする機会を得たりすると、より効果が高まること等が明らかとなった。今後の課題として、習い事に行かせたくても行かせることのできない状況にある家庭に焦点を絞り、英語活動を行っていない公立保育園などに焦点を絞ることで、より社会的意義のある調査を行いたいと考える。

1. はじめに

2020年度より、小学校における外国語活動が3年生から、外国語科が5年生から始まった。しかし、2017年度に国立教育政策研究所が発表した「小学校英語教育に関する調査研究(平成27～28年度)」では、学年が進むにつれ、英語に否定的な印象を持っている児童が増加しており、6年生では、26.8%が「どちらかといえばきらい」「きらい」と回答している(国立教育政策研究所, 2017)¹⁾。一般社団法人ダヴィンチマスターズが2021年に小学校3年生から6年生405名に行った調査では、学年を問わず、約3割が英語を嫌いと回答していたと述べている(ダヴィンチマスターズ, 2021)²⁾。子どもが英語を嫌いになった理由は、様々であると推測するが、英語は他の教科と比較した際に、使用言語が違う点が高品質であることから、英語を受け入れ難いと感じる子どもの困り感について、周りの大人たちが敏感になるべきであると考えられる。

英語活動は、学校により、1年生から定期的に外国語活動に取り組んでいる学校もある。英語教育が低年齢化してきたことから、幼児から習い事として英語に触れている子どもも増加しており、株式会社アウトソーシングテクノロジー(2021)³⁾によると、イー・ラーニング研究所が子どもを持つ20代から50代の男女254人を対象に、2020年12月に調査を実施したところ、保護者間で話題になった子どもの習い事は、英語・英会話スクール(111)、プログラミング教室(109)、学習塾(70)、スポーツ系(69)という順番となったことを報告している。幼稚園や保育園において英語活動を行っている園も増加しており、愛知県東郷町の公立保育園では、週に2回ALTが訪問し、朝から午後3時まで英語を使って生活をする取り組みが行われている(中日新聞, 2021)⁴⁾。よって、幼児期からの英語教育への期待が年々高まっていることが推測できる。

家庭における乳幼児に対するデジタルデバイスの使用について、2017年のベネッセの調査によると、2017年時点で乳幼児の母親の9割が、育児にスマートフォンを使用し、そ

のうちの2割がスマートフォンにほとんど毎日接していることやスマートフォンだけではなく、ビデオ、DVD、タブレット端末、パソコンなども使用されているという報告がなされている(ベネッセ, 2017)⁵⁾。使用用途としては、写真を見せるが84.4%、動画を見せるが76.2%で、使用機会では、親が家事で手をはなせないときにテレビ(64.0%)、ビデオ・DVD(35.8%)、タブレット端末(23.9%)と順に高くなっている。特にタブレット端末においては、2013年の16.8%から2017年の23.9%と使用率も前回の調査に比べ高くなっている(ベネッセ, 2017)⁶⁾。テレビ番組やインターネット動画・画像を見せることについてのメリット・デメリットについて「歌や踊りを楽しめる、知識が豊かになる」がメリットの1位、「目や健康に悪い、夢中になりすぎる、長時間の視聴や使用が続く」がデメリットの1位となっている(ベネッセ, 2017)⁷⁾。

よって、家庭における育児の中で、既にデジタルデバイスは使用されているものとし、デジタルデバイスの使い道として、「英語学習」を提案・実施することにより、子どもの小学校3年次からの外国語学習への苦手意識克服に役立つのではないかと考えた。

本研究においては、幼稚園の年長児に対し、家庭においてテレビ、DVDプレーヤー、スマートフォン、iPadなどのデジタル機器を用い、継続して英語に慣れしむことにより、効果が表れるかを調査、考察することで、幼児期のデジタルデバイスを使用した家庭における英語学習について提案することを目的としている。

2. 先行研究

(1) 英語教育への保護者の関心について

小学校3年生からの外国語活動が始まったことを受け、英語教育が低年齢化しており、幼児から習い事として英語を始めている子どもが増えている。

別府と阿久根(2018)⁸⁾は、2016年に4~6歳児をもつ親260名に対し、習い事に関する質問紙調査を行ったところ、全体の66.6%(174名)が習い事をしており、その中でも英会話などの語学教室に通っていると回答した親の割合は、サッカーと並び、上位4位(17名)となったと述べている。イー・ラーニング研究所が子どもをもつ20代から50代の男女170人を対象に、2021年末に実施した調査を行った結果、保護者間で話題になった子どもの習い事は、英語・英会話スクール(70)、プログラミング教室(68)、学習塾(46)、スポーツ系(43)という順番となり、2022年に子どもにさせたい習い事については、英語・英会話スクール(100)、プログラミング教室(82)、スポーツ系(48)となったと、教育家庭新聞(2022)⁹⁾は報告している。

英会話教室に通わせている理由について、未就学児(0歳~6歳)を英会話教室に通わせている親100人を対象に、株式会社ジャストイット(2022)¹⁰⁾がアンケート調査を実施したところ、100中24人が「将来役に立つから」、23人が「早く英語に慣れさせたい」、13人が「英語環境を与えたい」としている。頻度については、週1回以下が77人で最も多く、子どもに英語力がついたと実感するか、については、51人がそう思う、31人がどちらとも言えない、5人がそう思わない、5人が全く思わないという結果であったと報告している。一方、悩んでいることについては、「送迎や待ち時間が大変」が22人と最も多かった。しかし、「早いうちに英会話に通わせてよかったですか?」について、「強く思う」が19人、「そう思う」が65人であった。また、「子どもが小学校になってからも英会話を続けさせたいですか」については、「強く思う」が43人、「そう思う」が42人であった。

英語が将来役に立つという理由などで、年々習い事として、英語を習わせたいと思う親や実際に習わせている親が増えている一方で、習い事の悩みとして「送迎や待ち時間が大変」という悩みを抱えている。家庭でデジタルデバイスを使用して英語学習をすることで、送迎などの悩みが解消されることも推測することができる。と考える。

(2) 小学生の英語嫌いについて

2021年にダヴィンチマスターズが行った、英語に関する意識調査によると、405人の小学生(3年生100人、4年生105人、5年生100人、6年生100人)のうち、約7割の子どもが「好き」と回答している一方で、3割の子どもが「嫌い」と回答をしている(ダヴィンチマスターズ, 2021)¹¹⁾。文部科学省が2004年に公立小学校の4年生と6年生児童10,002人に行った「小学校の英語教育に関する意識調査」によると、「英語活動が嫌い」の理由として、英語を読むことがうまくできないから(50.4%)、総合的な学習の時間では、英語活動以外の学習の方が好きだから(41.9%)、友達と英語を使ってやりとりをすることがうまくできないから(39.7%)、外国人の先生や留学生など外国の人と話すことがうまくできないから(37.5%)、英語の歌を歌ったり、英語のゲームをしたりすることがうまくできないから(35.1%)と記載されている(文部科学省, 2004)¹²⁾。

小学校の外国語活動で扱う英語は、一朝一夕で獲得できるものではなく「慣れ親しむ」ことを通して、少しずつ習得していくことができるものである。『小学校学習指導要領(平成29年度告示)解説の外国語活動・外国語編』(2017)¹³⁾には、127か所「慣れ親しむ」に関連した表現が記載されている。よって、「慣れ親しむ」ことを通して、英語を習得することが必要となると考える。

(3) ICTを利用した教育について

ICTを使用した教育が近年進んでおり、既にタブレットを使用した遠隔授業も各学校において実際に行われるようになった。中学校、高校のみならず、小学校においても学校で貸与されたタブレットを家に持ち帰り、遠隔授業のために使用していた小学校も数多く見られるようになった。英語に特化したICTの在り方もパソコンからタブレット使用型に変わりつつあると推測される。

小学校における英語教育において、津田(2018)¹⁴⁾は、タブレットPCと民間英語アプリを活用することにより、小学校英語教育を補完し、小学生にとって充実した英語指導となることを示唆している。また、小学生が英語を勉強する場合、まず興味を持つ内容でなければならず、毎日少しずつ継続してネイティブの英語を聞き、使いたいと思う英語に触れることが重要であると述べている。小学校教育のみならず、幼児教育においてもタブレット端末のアプリを用いた研究も行われており、大宮・石田(2014, p.13)¹⁵⁾は、幼児のデジタル機器の利用実態とそのことについて、114名の保護者に意識調査を実施したところ、幼児が日常的にデジタル機器を使用していることや、保護者の半数が幼児向けアプリをダウンロードして幼児に遊ばせていること、スマートフォンよりもタブレット型端末の方が幼児一人で遊んでいることが多かったことを報告している。

一方で、堀田・松河・奥林・森田・深見・中村・松山・佐藤(2014)¹⁶⁾は、全国1000園を対象に、幼稚園におけるタブレット型端末を活用した保育での取り組み内容について質問紙調査を行ったところ、取り組みに対する意欲は低く、活用のイメージが抱きにくいと考えていることを明らかにしたが、一方で、カメラや図鑑アプリを活用した取り組みへの意

欲は比較的高い傾向が見られたと報告している。この件については、松山・堀田・佐藤・奥林・松河・中村・森田・深見(2017)¹⁷⁾は、保育現場での幼児向けアプリ活用につながるような保育者のアプリの評価観点について検討したところ、①実生活と関連した力の獲得、②創造性があり試行錯誤できる遊びの促進、③一人ではなく大人や友達と楽しめる共同・協同性、以上三点を評価観点と定めたことを報告している。

幼児教育現場におけるICT機器を用いたニーズは高まっていないが、保護者へのニーズは比較的高いことが予想されることから、家庭における英語教育を、タブレット端末等を用い行う方法が習い事に代わる方法として考えられる。

東矢・知花(2015)¹⁸⁾は、アプリの世界では言語に国境がなく、英語は最も多く使われている言語であるので、英語で作られているものであれば、すべて教材となる可能性を秘めていると言っても過言ではないことやタブレットの音声と映像・絵と文字を組み合わせることができるという特徴により、紙面では難しかった文字と音声の結びつきの強化の促進が見込まれるほか、学習者が、納得するまで個別に繰り返して、音声を容易に確かめることができ、画像が意味の理解を支援する、という構成が共通して見られると説明している。

斎藤(2017)¹⁹⁾は、使える語学力を身に付けるためには、状況のなかの意味を理解することが大切で、映像を使用することがベストであり、特に「一定の状況を目で見ながら、変化する音を耳で聴き、同時に発声を口で行う」ことができるものを用いることが薦められると述べている。

よって、各家庭の状況や教育方針に合った、デジタルデバイスの使用により、英語教育を家庭において行うことで、小学校における英語活動が始まる前に、英語に触れたことがあるという自信に繋がるのではないかと考えた。

3. 研究の目的

本研究は、各家庭において、テレビ、DVD プレーヤー、スマートフォン、iPad、パソコンなどを活用した英語教育を行うことにより、幼少期より継続的に英語に慣れ親しむことで効果が表れるかを調査、考察することで、家庭における英語学習について提案することを目的としている。

4. 対象と方法

(1) 調査対象について

研究対象者は、岡崎市にあるA幼稚園に所属する5歳児をもつ親21人であった。A幼稚園は、園の授業の中で、ネイティブ・イングリッシュ・スピーカーによる英語活動の時間がクラス毎、月に1時間ずつ確保されており、園に通う全員が1ヶ月に1度は英語のネイティブスピーカーによる授業に触れる機会をもっている。また、年長児を対象とした、同ネイティブによる課外授業が、週に2時間英語活動の時間が確保されており、希望すれば参加ができることとなっている。

研究対象者は、5歳児で上述した課外活動やその他英語教室などに通っていない児童9人と、課外活動やその他英語教室などに通っている12人であった。

(2) 研究方法について

A幼稚園に通う年長児の保護者を対象とし、調査協力を掛かる同意を得た。調査の目的や調査方法、調査を行うにあたって、子どもへの英語教育方法についての説明について書

面で行い、必要に応じて対面での説明を行った。事前の質問紙調査を1回、経過報告として3回、最終の質問紙調査を1回、合計5回質問紙調査を行った。1回目は、4月末から5月初旬にかけて、2回目は、6月末から7月初旬にかけて、3回目は、8月末から9月初旬にかけて、4回目は10月末から11月初旬にかけて、5回目は12月末から1月初旬にかけて、質問紙調査を行った。

依頼の内容は、家にある ICT 機器を使用し、毎日 30 分以上英語に慣れ親しむ時間をもつことや ICT 機器は、テレビ、DVD プレーヤー、スマートフォン、iPad、パソコン、CD プレーヤーなど機器は問わないが、できれば音声と共に画像を見ることができものを推奨した。

(3) 質問項目について

1 回目の質問紙調査項目は、(1)子どもにテレビ、DVD、iPad などのタブレット端末、スマートフォン等を使って動画などを見せているか(2 件法) (2)使用頻度(複数の中から一つ選択) (3)一回当たりの使用時間(記述式) (4)一日当たりの使用時間(記述式) (5)子どもの英語学習への関心(4 件法) (6)今までに、テレビ、DVD、iPad などのタブレット端末、スマートフォン等を使って、英語に関する動画を見せたことがあるか(2 件法) (7)英語の動画を見せる際の使用機器(複数選択可) (8)英語の動画を見せる際のコンテンツ(複数選択可) (9)子どもの英語に関する興味(複数選択可) (10)英語に関する行動(複数選択可) (11)英語の習い事の種類について(記述式) (12)保護者がこの企画に期待すること(自由記述)。

2 回目、3 回目、4 回目の質問紙調査項目は、(1)英語の習い事の種類について(記述式)、(2)子どもにテレビ、DVD、iPad などのタブレット端末、スマートフォン等を使って動画などを見せているか(2 件法) (3)使用頻度(複数の中から選択) (4)一回当たりの使用時間(記述式) (5)一日当たりの使用時間(記述式) (6)保護者は子どもと一緒に動画を見たか(4 件法)、(7)保護者の子どもの英語学習に対する関心(4 件法) (8)保護者自身の英語学習への興味(4 件法)、(9)英語の動画を見せる際の使用機器(複数の中から一つ選択)、(10)(9)の中で最も使用しやすかった機器、(11)英語の動画を見せる際のコンテンツ(複数選択可)、(12)(11)の中で最も使用しやすかったコンテンツ(複数選択可)、(13)子どもの英語に関する興味(複数選択可)、(14)子どもの最も英語に関して興味を示したこと(複数選択可)、(15)英語に関する行動(複数選択可)、(16)英語の動画を見せる際のコンテンツ(複数選択可)、(17)子どもが英語を好きになったか(親の主観)(4 件法)、(18)子どもが英語について自信をもっているか(親の主観)、(19)子どもの目立った変化について(自由記述)、(20)子どもが動画を見ることで、保護者の家事の時間が増えたか(3 件法)、(21)(20)の理由(自由記述)、(22)動画視聴について、困難なことや困っていること(自由記述)、(23)動画視聴や英語教育について、筆者への相談(自由記述)、(24)英語動画資料の取り組みの意味(2 件法)、(25)(24)の理由(自由記述)、(26)これからも動画視聴を続けていくか(2 件法)、(27)動画視聴の取り組みを終了する理由(自由記述)

5 回目の質問紙調査項目は、(1) 英語の習い事の種類について(記述式)、(2)子どもにテレビ、DVD、iPad などのタブレット端末、スマートフォン等を使って動画などを見せているか(2 件法)、(3)使用頻度(複数の中から選択)、(4)一回当たりの使用時間(記述式)、(5)一日当たりの使用時間(記述式)、(6)保護者は子どもと一緒に動画を見たか(4 件法)、(7)保護者の子どもの英語学習に対する関心(4 件法)、(8)保護者自身の英語学習への興味

(4 件法)、(9)英語の動画を見せる際の使用機器(複数の中から一つ選択)、(10)(9)の中で最も使用しやすかった機器、(11)英語の動画を見せる際のコンテンツ(複数選択可)、(12)(11)の中で最も使用しやすかったコンテンツ(複数選択可)、(13)子どもの英語に関する興味(複数選択可)、(14)子どもの最も英語に関して興味を示したこと(複数選択可)、(15)英語に関する行動(複数選択可)、(16)英語のコンテンツを選ぶ際に最も重視していること(複数選択可)、(17)英語のコンテンツを選ぶ際に、子どもが最も重視していること(複数選択可)、(18)子どもが英語を好きになったか(親の主観)(4 件法)、(19)子どもが英語について自信をもっているか(親の主観)、(20)子どもの目立った変化について(自由記述)、(21)子どもが動画を見ることで、保護者の家事の時間が増えたか(3 件法)、(22)(21)の理由(自由記述)、(23)初回の保護者の期待が実現したか(4 件法)、(24)(23)の理由、(25)英語動画視聴の取り組みの意味(2 件法)、(26)(25)の理由(自由記述)、(27)これからも家庭で動画視聴を続けていくか(4 件法)、(28)(27)の理由(自由記述)、(29)全体的な感想(自由記述)であった。

5. 結果と考察

(1) デジタルデバイスの使用頻度や使用時間、使用機器、使用コンテンツ、動画選択の際の重視ポイント、保護者の子どもの英語学習への関心、保護者自身の英語学習への関心等について

デジタルデバイスの使用頻度については、2回目から5回目を平均すると、「毎日使用していた」が64.3%、「週に数回程度」が31.0%、「週1程度」が3.6%、「月に1回程度」が1.2%であった。第1回目の事前調査では、「毎日使用していた」が85.0%、「週に数回程度」が15.0%であった。デジタルデバイスの一回当たりの使用時間について、2回目から5回目を平均すると、41分程度、一日当たりの使用時間については、1時間21分程度であった。第1回目の事前調査では、一回当たりの平均使用時間が1時間21分程、一日当たりの平均使用時間が1時間59分程であった。この取り組みにより、視聴時間が減ったのは意外であった。ある程度目的をもってデジタルデバイスを使用したことが使用時間の減少に繋がった可能性があるかと推測する。

使用した機器(複数選択可)については、2回目から5回目を平均すると、テレビ(76.2%)、iPadなどのタブレット端末(35.7%)、スマートフォン(28.6%)、DVD(23.8%)、その他(4.8%)であった。また、使用した機器の中で最も使用しやすかったもの(2回目から5回目の平均)は、テレビ(60.7%)、iPadなどのタブレット端末(21.4%)、DVD(9.5%)、スマートフォン(6.0%)、その他(2.4%)であった。その他の内訳としては、車のテレビ、NETFLIXが挙げられた。使用機器については、約3割がスマートフォンを使用していたが、「使用し易い」という観点では、6.0%と低い評価であった。一方で、テレビの使用率が高かった。

使用コンテンツ(複数選択可)については、2回目から5回目を平均すると、テレビ番組(63.1%)、YouTube Kids(52.4%)、YouTube(32.1%)、DVD(28.6%)、英語のアプリ(9.5%)、その他(8.3%)であった。最も使用しやすかったコンテンツ(2回目から5回目の平均)は、テレビ番組(39.3%)、YouTube Kids(25.0%)、DVD(13.1%)、YouTube(11.9%)、その他(7.1%)、英語のアプリ(3.6%)であった。その他の内訳としては、ネットフリックス、パソコンが挙げられた。使用コンテンツについては、テレビ番組が最も使用され、最も使用し易かったという評価を得た。YouTubeやYouTube Kidsも使用されていたものの、質問項目(21)の自

由記述欄には、「英語のアニメなどは、途中で飽きて集中できていないように思う。本人が言うには、何を言っているか、分からないので、面白くないとの事。「英語であそぼ」のように、少し日本語で説明などがあると集中して見ている。」「YouTube kids を使っていると、自分で好きな動画に変えてしまい、コントロールが困難です。」と、タブレット端末やスマートフォンを使用するよりもテレビの方が子どもの視聴をコントロールし易いという意見が見られた。

5回目のみで訊いた、「親から見た、子どもの動画選択の際の重視ポイント」については、85.7%が「動画の内容」、9.5%が「好きな種類のDVD」、9.5%が「親がすべて選んでいる」であった。視聴する動画を選択する選択権が親であるという人は少なく、子どもの志向により、視聴する動画を選択していたことが明らかとなった。

保護者の子どもの英語学習への関心について、2回目から5回目を平均すると、とてもあるが25.0%、まああるが66.7%、あまりないが6.0%、ないが0.0%と、肯定的な意見が90%以上であった。また、保護者の保護者自身の英語学習への関心について、2回目から5回目を平均すると、とてもあるが11.9%、まああるが60.7%、あまりないが27.4%、ないが0.0%と、肯定的な意見が70%以上であった。

(2) 子どもの英語に関する興味と、英語に関する行動変容について

子どもの英語に関する興味（複数選択可）について、2回目から5回目の平均は、「英語の歌」が64.3%、「英語の映画が」10.7%、「英語のテレビ番組」が46.4%、「英語のアニメ」が61.9%、「英語の絵本」が1.2%、「英語のおもちゃ」が10.7%、「外国について」0.0%、「その他」が9.5%であった。その他の内訳は、「海外のYouTube動画」「ゲーム実況」「英語の文字」「英語のゲーム」「英語のクイズ」「外国の方がやっている子ども向けの動画」であった。2回目から5回目にかけて大きな変化は見られなかった。

子どもが最も興味を示す英語について、「英語の歌」が46.4%、「英語のアニメ」が34.5%、「英語のテレビ番組」が7.1%、「その他」が7.1%、「英語のおもちゃ」が4.8%、「英語の映画が」0.0%、「英語の絵本」が0.0%、「外国について」0.0%であった。その他の内訳は、「海外のYoutuberの動画」「ゲーム実況」「外国の方がやっている子ども向けの動画」であった。2回目から5回目にかけて見られた大きな変化としては、「英語のアニメ」が、2回目が28.6%、3回目が33.3%、4回目が38.1%、5回目が38.1%へと増加が見られた。

(1) で述べた「親から見た、子どもの動画選択の際の重視ポイント」について、「動画の内容」であった。よって、子どもが自分で動画を選択する際に、「英語のアニメ」を、回数を重ねるにつれ、選択していった可能性が推測される。

「今までにお子様は、英語に関してどのような行動を自分からとったことがありましたか？（複数選択可）」については、2回目から5回目の平均は、「英語で歌う」が72.6%、「英語で言葉を発する」が65.5%、「映画やアニメに出てくる英語のセリフを発する」が35.7%、「英語の絵本を音読する」が0.0%、「その他」が13.1%であった。その他の内訳は、「パソコンでタイピングをする」「英語の文字を見て「p?」「A?」など聞く」「単語が分かる」「英語の単語クイズを出す」「英語のレッスンごっこをする」「アルファベットをみつけて読む」「数字や簡単な単語」「英単語のあてっこクイズ、英語の授業ごっこ」「子どもが楽しんで見られる」「ローマ字で自分の名前を書く」「特になし」であった。

2回目から5回目にかけて変化した項目は、「映画やアニメに出てくる英語のセリフを発する」であり、2回目が4.8%、3回目が38.1%、4回目が47.6%、5回目が52.4%と、

徐々に上昇した。上述において、「英語のアニメ」を選択する割合が増え、それらを英語で継続的に視聴することにより、インプットがなされ、そのアウトプットとして自然に英語のセリフを自ら発することに繋がったのではないかと推測する。

(3) 子どもの英語好きの変化および、子どもの自信の変化について

質問項目(16)「保護者様から見て、お子様は、英語の動画を見るようになり、英語が好きになったように見えますか？」については、2回目以降において、否定的な意見(あまりそう思わない、そう思わない)が 33.4%(2回目)、23.8%(3回目)、23.8%(4回目)、19.0%(5回目)と、徐々に減少した。

質問項目(17)「保護者様から見て、お子様は、英語の動画を見るようになり、英語について自信がもてるように見えますか？」の結果は、否定的な意見(あまりそう思わない、そう思わない)が2回目(52.4%)、3回目(52.4%)、4回目(42.9%)、5回目(33.3%)と減少した。

動画を「親子で一緒に観た」人数は、2回目が18人、3回目が15人、4回目が13人、5回目が13人と少しずつ減少をしていった。親子で一緒に見た群と見なかった群に分け、2回目から5回目の平均を比較したところ、「英語が好きになったように見える」について、一緒に見た群は、「とてもそう思う」が17.1%、「まあそう思う」が63.2%、「あまりそう思わない」が19.6%、「そう思わない」が0%、一緒に見なかった群では、「とてもそう思う」が9.4%、「まあそう思う」が50.0%、「あまりそう思わない」が32.3%、「そう思わない」が8.3%となった。「英語について自信がもてるように見えるか」については、一緒に見た群は、「とてもそう思う」が12.7%、「まあそう思う」が45.5%、「あまりそう思わない」が41.8%、「そう思わない」が0.0%、一緒に見なかった群では、「とてもそう思う」が3.1%、「まあそう思う」が37.5%、「あまりそう思わない」が47.9%、「そう思わない」が11.5%となり、どちらの結果も一緒に見た群の方が肯定的な意見が高い結果となった。斉藤(2017)²⁰も親子一緒に英語活動を行った方が良いと述べており、親の関心が子どもの結果を左右すると考えられる。

今回の調査では、参加者全員が幼稚園の学習で月に1回、英語ネイティブの教師により、英語活動を行っている。21人の参加者には、幼稚園における英語の課外授業や園外での英語の習い事を行っている者もあり、月1回の英語活動のみを行っているグループ(9名)と、課外活動等を行っているグループ(12名)に分け、グループ毎に差があるかについて2回目から5回目の平均を比較したところ、「英語が好きになったように見える」について、習っていない群は、「とてもそう思う」が0.0%、「まあそう思う」が63.9%、「あまりそう思わない」が36.1%、「そう思わない」が0.0%、習っている群では、「とてもそう思う」が27.1%、「まあそう思う」が56.3%、「あまりそう思わない」が14.6%、「そう思わない」が2.1%となった。「英語について自信がもてるように見えるか」については、習っていない群は、「とてもそう思う」が2.8%、「まあそう思う」が36.1%、「あまりそう思わない」が58.3%、「そう思わない」が0.0%、習っている群では、「とてもそう思う」が16.7%、「まあそう思う」が47.9%、「あまりそう思わない」が31.3%、「そう思わない」が4.2%となり、どちらの結果も習っているが肯定的な意見が高い結果となった。

先行研究(1)で述べた通り、家庭でデジタルデバイスを使用して英語学習をすることで、習い事の代わりになることを期待したが、より多く習い事を行っている方が効果が高まっていることが判明した。これは、英語の能力の向上には、インプットとアウトプットが必要であるが、習っている群では、家庭でデジタルデバイスを使用しながらインプットした

ものを、より多く外でアウトプットする機会を得ていると考えられ、それが自信へと繋がったと推測される。

6. まとめと今後の課題

本研究は、家庭においてデジタル機器を使用し、継続して英語学習を行うことで、子どもが英語に対する興味や親しみをもつ等の効果について調査、考察することにより、家庭における英語学習について提案することを目的としていた。始めた当初、数名は途中辞退者が出ると予想していたが、全員が5回目を終えることとなった。自由記述欄には、「1カ月もすると、アニメを「英語バージョンで見るね!」と言って、(中略)英語で書いてある看板を見て「何て書いてあるの?」と、聞いてくれたり、(中略)英語の文を話そうとする姿が見られるようになった。」「(省略)一緒に歌を歌ったり、特に何も教えてなくても自然と発音ができていたり、大きな変化はなくとも少しずつ英語に慣れてくれているようで、成長を感じた。親子で一緒に視聴しながら、歌を歌ったりすることが楽しい時間でもあり、親である自分も英語が身近に感じることができた。」「動画を見せるだけなので、親も何も頑張ったりする必要がなく、気軽に続けることができた。何より、子どもが英語への興味関心が高まったように感じる。これからも続けていこうと思う。」「子どもも親も気軽に取り組み、子どもも英語に対しての苦手意識が減ってきたように感じる。」「親が教えられないネイティブな発音や子ども自身が楽しい(中略)と思いながら英語に触れられたことはよい時間だったと思う。」等、親子共に楽しめたことや気軽に取り組めたこと、少しずつだが子どものアウトプットを間近で見ることができたこと等の記述が散見された。

(3)で述べた通り、子ども達は徐々に「英語が好き」「英語に自信をもつ」ようになり、親子で一緒に観ていたり、より多く外でアウトプットする機会を得ていたりする程、効果が高まったことが明らかとなった。

質問項目(19)「動画を見せることで、保護者が家事などをすることができる時間が増えましたか」の2回目から5回目の平均では、「増えた」が41.7%、「変化なし」が58.3%、「減った」が0.0%であった。家事の時間が増える場合、働いていたり、子どもが多かったりと、特に忙しい母親を対象とすることも考えられる。上述の通り、デジタルデバイスを使用した家庭学習は一定の効果を得られることが考えられることから、今後の課題として、習い事に行かせたくても行かせることのできない状況にある家庭に焦点を絞ること、また、既に英語活動を行っている幼稚園ではなく、英語活動を行っていない公立保育園などに焦点を絞ることで、より社会的意義のある調査を行っていきたいと考える。

附記

本研究は、令和4年度岡崎女子大学・岡崎女子短期大学研究倫理委員会による研究倫理審査No. 22018の承認を受けて実施している。

引用文献

- 1) 国立教育政策研究所「小学校英語教育に関する調査研究【平成27～28年度】」2017年、https://www.nier.go.jp/05_kenkyu_seika/pdf_seika/h28a/syocyu-4-1_a.pdf(最終閲覧日:2022年11月3日)
- 2) 一般社団法人ダヴィンチマスターズ「英語に関する小学生の意識調査①「授業の好き嫌いについて」」2021年、https://davincimaster.com/report/research_engli-sh/(最終

閲覧日：2022年11月3日)

- 3) 株式会社アウトソーシングテクノロジー(2021)「イー・ラーニング研究所、子どもの習い事は英会話スクール、プログラミングが人気」<https://ict-enews.net/-2021/01/14e11-2/>(最終閲覧日：2022年11月3日)
- 4) 中日新聞(2021)「1日6時間、週2回「英語オンリー」 東郷の5公立保育園」<https://www.chunichi.co.jp/article/304247> (最終閲覧日：2022年11月3日)
- 5) ベネッセ教育総合研究所(2017)「第2回 乳幼児の親子のメディア活用調査」https://berd.benesse.jp/up_images/publicity/press_release20171016_2media.pdf(最終閲覧日：2022年11月3日)
- 6) 前掲5)
- 7) 前掲5)
- 8) 別府さおり・阿久根雅「幼児の習い事に関する研究—性差に着目した考察—」『東京成徳大学人文学部・応用心理学部研究紀要(25)』2018年、97-104頁
- 9) 株式会社 教育家庭新聞社「子供にさせたい習い事は「英会話」や「プログラミング」が上位に～子どもの年末年始に関する調査」2022年、<https://www.kknews.co.jp/-news/20220114yt03>(最終閲覧日：2022年11月3日)
- 10) 株式会社ジャストイット「未就学児を英会話教室に通わせている親 100人に実情を調査！84%が通わせてよかったと回答」2022年、<https://www.miya-manavi.net/report-little-child-english-school/>(最終閲覧日：2022年11月3日)
- 11) 前掲2)
- 12) 文部科学省「小学校の英語教育に関する意識調査」2004年、https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/siryo/attach/1379978.htm(最終閲覧日：2022年11月3日)
- 13) 文部科学省『小学校学習指導要領(平成29年度告示)解説の外国語活動・外国語編』2017年
- 14) 津田敏「ICTとアプリ活用による小学生英語教育指導の一考察：タブレットPCと民間英語アプリの活用」『姫路日ノ本短期大学 研究紀要(40)』2018年、33-47頁
- 15) 大宮明子・石田有理「幼児のデジタル機器利用実態と保護者の意識」『十文字学園女子大学人間生活学部紀要(12)』2014年、13-24頁
- 16) 堀田博史・松河秀哉・奥林泰一郎・森田健宏・深見俊崇・中村恵・松山由美子・佐藤朝美「タブレット端末を活用した保育での取り組み内容の調査」『日本教育工学会第30回全国大会』2014年、567-558頁
- 17) 松山由美子・堀田博史・佐藤朝美・奥林泰一郎・松河秀哉・中村恵・森田健宏・深見俊崇「保育現場での活用を想定した幼児向けアプリの評価観点の検討」『日本教育工学会論文誌(40)』2017年、117-120頁
- 18) 東矢光代・知花綾香「iPadで拓く英語教育(1)アルファベット文字の学習に資するアプリについての考察」『琉球大学欧米文化論集(59)』2015年、47-65頁
- 19) 斉藤淳『ほんとうに頭がよくなる世界最高の子ども英語』2017年、ダイヤモンド社
- 20) 前掲19)

謝辞

本研究に御協力頂きました、A幼稚園の皆様にご心より感謝を申し上げます。